疾風怒濤の辰年来たる

これから地方が活性化していくためには、私を含め県庁で毎日を送っている人間集団が「地方政府」の職員としての自覚と見識を持ちうるかどうかが、やはり大きな意味を持っていると思う。そもそも「熊本県庁」なんて看板を掲げているから意識が希薄になる。

「政府」、つまり国に頼らず自助努力の先頭に立つという気概をこめて「熊本政府」と看板を掛け替えたらどうだろうか。国に対しては、地方への権限移譲や財源の再配分は実質上の「遷都」になりうるのだと強く主張していきたい。その前提として、自分達でやれることは自ら行うという自助努力、「自立自興」の精神が何よりも大切である。

地方を活性化していくうえで、もう一つ大切なことは地域の目標、そのグランド・デザインを明らかにすることである。明治以来、我が国の近代化は、日本全体が一つの姿になることだったといえる。最近「地域づくり」とか「村おこし」とかが盛んだが、相変らずどこかの物真似が多い。しかし、これからは、今までの「追いつき型」ではなく、将来を指向して、他とは違った強い自己主張を持った地域づくりが必要だと思う。地域のアイデンティティを支えるのは、外国でもない、ましてや東京でもない、その地域にしかない歴史や風土そして文化なのである。

地方がそれぞれの強い個性を持った文化の上に、自己主張を持った地域づくりを目指して競い合って歩き出した時こそ本物の「地方の時代」の到来である。また、そうなってこそ日本は、彩り、ゆとりを持てる、つまり真の文化を持てることになるのである。

知事雑誌投稿
「地方反乱の時代」より

昨年の12月13日、岐阜県で行われた
第5回全日本実業団女子駅伝で、
熊本の松野明美選手（19）は、増田選手を抜きさり、
12人抜きで、一躍日本女子陸上界のホープに躍り出た。
1988年、最も注目したい女性の一人。

写真提供 毎日新聞社

それでは自治とは何か、ということになりますが、わたしはそこに住む人たちが自分たちの地域を経営し、そこに文化を育てていくことだと思います。

経営というと収支決算といったことが連想されますが、民間の経営と少し違って地域の経営とは、この地域をどうしたいかという目標を立て、それを実現していくことです。そのために地域の資源を活用したり、組み合わせたり、あるいは掘り起こしたりすることです。

資源は水や土地といった天然資源だけとはかぎりません。そこに住む人たちの知恵ややる気、伝統や特性といったものも資源です。

そうしたものをうまく生かして、その地域の文化をつくりあげていく。ここに地域経営の目ざすものがあるだろうと思うわけです。

熊本県の日本一づくり運動にしても、その地域の持つ特性を伸ばして、どこに対してもはっきりとものが言えるような地域の文化を創っていくことではないでしょうか。

「行政の文化化を考える」――法政大学法学部教授 田村明氏 熊本での公演より